

二〇二四年度

第三回 入学試験問題

国語（五十分）（全十一ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはつきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

一 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 自伝小説をシユツパンする。
- (2) 円のチョツケイを計測する。
- (3) ケンコウに気をつける。
- (4) 職人のジユクレンの技を見学する。
- (5) 彼は日本をジユウダンする長い旅に出かけた。

二 次の文を意味が通るように並べかえたときに、使わない言葉を一つ選

び、記号で答えなさい。

- (1) ⑦眺める ④庭に ⑨花を ⑤咲いている ⑧鳥を ②美しい
- (2) ⑦私は ④降り始めた ⑨突然 ⑤暗くなり ⑧大粒の
④雨が ⑥空が
- (3) ⑦競っている ①マラソンの ⑨進んで ⑤ゴールに
④先頭集団が ⑨向かって
- (4) ⑦彼は ④文具を ⑨文化祭の ⑤購入した ④友達を
⑨するために ⑤準備を
- (5) ⑦姿を ④なかなか ⑨眠る ⑤撮る ④ペットが ④妹は
⑤写真に ④いつも

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある日の放課後、「ぼく」(清野)は同級生の 飯島さんから百人一首大会の特訓につきあつてほしいという依頼を受ける。友達関係に劣等感をいだいている「ぼく」はその依頼を断つたが、飯島さんが他の友達と特訓をしている様子を陰で見ながら、心配している。

塾の講義が終わつたあと、宿題のプリントをながめながら帰ろうとしていると、足立くんが追いついてきた。足立くんは去年の末から、ぼくとは同じ塾に通っている。

ぼくが持つプリントの束を見て、足立くんが怖れおのいたように言った。「うひやあ、それ全部次までにやってくる宿題かよ。やっぱハイレベルコースはやべえな」

そんなでもないよ、とぼくは①愛想笑いでこたえた。実際、プリントをながめていたのは、帰宅中も進めていないと終わらないからではなく、空間図形の発展問題が解きがいがあつておもしろそうだったからだ。

足立くんといっしょの帰り道に、ぼくはいつも以上に居心地の悪さを感じていた。それはきつと、部活のみんなのカラオケのことを、ぼくがまだ引きずっているせいだ。そのせいで足立くんと自分を比較して、暗い気持ちになつてしまうのだろう。

けれど足立くんは、そんな②ぼくの気も知らずに話をしてくる。

「それにしても飯島のやつ、なんであんなに優勝したがつてるんだらうなあ。優勝したら給食が大盛りになるとか勘違いしてんじゃねえかな、あいつ」

話題が百人一首大会のことになると、足立くんが冗談まじりにそう言った。ぼくも不思議に思っていたので、「そうだよ」と相槌を打った。

「特訓 頑張ってるみたいだけど、そんなに無理しなくていいのに。飯島さんにはほかに取り柄があるんだからさ」

「飯島の取り柄って、大食いなどか？」

「そこじゃなくて、人気者で友達がたくさんいるところ」

そうだよ。そんなにすばらしい長所があるんだから、欲張らなくていいじゃないか。ぼくは内心不満に思った。百人一首の札を完璧に暗記できなかった、ぼくが飯島さんのように、おおぜいの友達に慕われることはない。

胸の中のため息をついていると、足立くんが尋ねてきた。

「清野、たしか前におれにも言ったよな。人気者なんだから、テストの点数を気にしないでいいだろ、とか」

足立くんのその言葉に、ぼくはドキッとしてしまった。ぼくなんかとの些細な会話を、足立くんがおぼえているとは思っていなかった。

「なるほど、もしかしてあれか。清野もおれみたいな超人気者になりたいのか！」

「まさか、違うよ！ ぼくが③足立くんみたいになれるわけじゃない！」

「いや、突っこんで！そこは自分で超人気者とか言うなって突っこんで！」

足立くんが嘆くので、ぼくはおろおろと謝った。

そのまま「」にして、話題を変えてしまうこともできた。なのにぼくはなぜか、足立くんの横顔をちらつと見てから、「人気者になりたいわけじゃないけど」と話を続けていた。

「この前、足立くんが友達のミルクを集めて、すごく濃いコーヒーマルクをつくってたでしょう。あれを見て思ったんだ。ぼくにはあのコーヒーマルクの味は、一生わからないだろうな、って。そう考えると、残念な気分になったりもしてさ」

足立くんはきよとした顔になった。だけど、そんな顔になるのもしょうがない。足立くんには、ぼくの気持ちはわかってもらえないだろう。

そう思っていたら、足立くんが戸惑ったように言いかえしてきた。

「いや、なんだかよくわかんねえけど、べつに飲みたきゃ飲めるだろ。だってほら、牛乳の量を少なくしてから、ミルクを混ぜればいいだけの話じゃん。そうすりゃ超濃いコーヒーマルクができるだろ？」

えっ、とぼくは首を傾げた。そしてたっぷり何秒間か考えこんでから、あつ、と声をあげてしまう。

足立くんの言うとおりだった。どうしてそんな簡単なことに気づかなかったのだろう。小学生でもわかりそうなものじゃないか。

ぼくは自分のまぬけさ加減に絶句した。けれどそれからすぐに、もしかすると、思いなおす。

そう、もしかすると最初からあきらめていたから、驚くほど単純な方法にも、気づくことができなかったのかもしれない。足立くんのようになんて

なれるわけがないと、そう思いこんでいたから。

「本気で気づいてなかったのかよ。清野つてめちゃうちゃ頭いいのに、結構めけてるとこあっておもしろいよな」

足立くんがおかしそうに言った。④のあまり、穴があったら入りたいたいよ
うな気分になりながら、同時にぼくはうれしきも感じていた。勉強ばかり
のつまらないやつだ、と言われたことはあっても、おもしろいなんて言われ
たことは、これまで一度もなかったから。

「だいたい、飲みたかったんだったら飲みたいてえよ。ノリでやったらマ
ジ甘すぎできつかったんだから」

冗談めかした足立くんの言葉に、⑤ぼくはまたはつとした。

たしかに、そうすればよかったのかもしれない。ぼくにも飲ませて、とか、
ぼくも混ぜて、とか、思いかえせばぼくはそんなふうには、自分から誰かに
声をかけたことがほとんどなかったような気がする。友達に囲まれて楽し
そうにしている足立くんや飯島さんをうらやましがりながら、誰かと親し
くなろうと積極的に行動することがなかったのだ。ぼくが教室で浮いてし
まっているのも、みんながぼくを敬遠するからじゃなく、ぼくのほうがみん
なに近づこうとしなかったせいなのかもしれない。

それもまた、特濃コーヒー牛乳のつくりかたと同じで単純なこと。これま
でずっと気づかなかったのが、信じられないくらいに。

じゃあ、とぼくはためらいがちに言った。

「次にやったときは、ぼくにも少し飲ませてくれるっ」

「おう、もちろん……って、もうやらないってのー」

足立くんが平手の裏でぼくの胸をびしっ、と叩いた。なんだか漫才のこ
ンビになったみたいで、ぼくはおかしくなってふきだしてしまった。

そんなぼくの反応を見て、足立くんも満足そうに笑った。

特訓につきあってほしい、と再び飯島さんに頼まれたのは、塾帰りに足立
くんと話した翌日だった。昼休みに空き教室に連れこまれ、「お願いっ」と
懇願されて、ぼくは□になってしまった。

「けどさ、もうほかの友達と特訓してるでしょう。ぼくが手伝ってもあんま
り意味ないんじゃないかな……」

「そんなことないよ。美貴にも言われたんだ。チームメイトとしてしっかり戦略
を練って準備をしないと優勝は無理だって。だからお願い清野、協力してく
れたら、これあげるから！」

飯島さんが差し出したのは、給食のアーモンドフィッシュの小袋だった。

⑥それを見てぼくは目を丸くした。

「清野、これ好きでしょ。だから……」

そういえば、前にいっしょの班になったとき、そんな話をした記憶がある。
だけど、そのとき飯島さんは、自分もこれが好物なのだ、と話していたはず
だ。食べるのが大好きな飯島さんが、好物を報酬として差しだしてきたこ
とに、ぼくは目の前の現実を疑うほど驚いていた。

「べつしてさ、今まで……」

ぼくが思わずつぶやくと、飯島さんはわずかにためらう素振りを見せてから、その理由を教えてください。

「……今度ね、転校するんだ、あたし」

「えっ、転校って、いつ？」

「三月の末にね。百人一首大会が終わったら、もうそういう行事って三学期終わるまでないでしょ。だから最後に百人一首大会で優勝して、思い出を残したくなって思ったんだ。賞状をもらって、転校した後も部屋に飾っておけたらな、って。あたし、賞状とか全然もらったことないからさ」

思いもしなかった深刻な理由に、ぼくは動揺してしまった。友達みんなは知ってるの、とぼくが尋ねると、飯島さんは寂しそうにほほえんで、首を横に振った。

「まだ話してない。話をなくちゃとは思ってるんだけど、言いだしづらくって」
転校の話を知って、ぼくはますます怖気づいてしまった。軽々しく引き受けて、優勝できなかつたら責任が取れない。

「ごめん、やっぱり引き受けられないよ。ぼくは飯島さんに謝ろうとした。けれどその直前で、ぼくの頭に足立くんの顔が思い浮かんだ。足立くんならどういふとき、⑦、と思った。

どう頑張っても、ぼくは足立くんのようににはなれない。だけど、そうやってあきらめて、ただうらやんでいるだけでは、きつとなにも変わらない。

ぼくも足立くんや飯島さんのように、もっとみんなと仲よくなりたい。そのため、これからはもっと積極的に、まわりのみんなと関わっていききたい。

そう思っているなら、⑧して逃げてしまっただ駄目だ。

不安な気持ちをおさえつけて、ぼくは飯島さんに言った。

「わかったよ。優勝させてあげられるかどうか、約束はできないけど、ぼくも特訓につきあうよ」

「ほんとに!?! ありがとう清野!」

飯島さんは顔を輝かせて、ぼくの手を強く握る。その喜びのように、こっちまでうれしくなってしまういたら、「話は聞かせてもらったぜ」と声が聞こえた。驚いて振りかえると、教室の入り口に足立くんの姿があった。

「げっ、なに盗み聞きしてるのよ足立!」

飯島さんが慌てふためいて足立くんをとがめた。けれど足立くんはしれっとこたえる。

「いや、清野が連れてかれるのが見えたから、飯島に襲われないか心配になって。そんなことより、なんでおれには相談しないんだよ。おれもチームメイトなんだぞ」

「だってあんた、口が軽いから、転校のことは話せないと思って……」

「信用ねえなあ。黙ってほしけりゃ黙ってやるよ。とにかく、おれも協力するから、さっさと特訓始めようぜ。大会まであとちょっとしかないんだからよ」

足立くんの言葉に、ぼくもうん、とうなずいて飯島さんの顔を見つめた。飯島さんは泣くのをこらえるような笑顔になって、ありがとう、とくりかえした。

それからぼくらは教室にもどって、早速特訓を始めた。勝つための戦略を練り、ふたりがおぼえる札を決めたら、まずはひたすら札を暗記する。

⑧報酬のアーモンドフィッシュは、特訓の最中に三人で分けあって食べた。

(如月かずき『給食アンサンブル』より)

*1 部活のみんなのカラオケのこと……「ぼく」の所属しているバドミントン部の一年生が、「ぼく」を除いたみんなで駅前のカラオケ店に遊びに行っていたこと。

*2 ミルメーク……粉末のコーヒー牛乳の素。

問一——線①「愛想笑い」とはどのような笑いですか。適当なものを、次の

ア エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手を小ばかにした笑い

イ 声をおさえたひそかな笑い

ウ 相手に合わせるための笑い

エ 心の苦しさをまぎらわすための笑い

問二——線②「ぼくの気」とありますが、これは「ぼく」のどのような気持ちですか。二十五字以内で説明しなさい。

ア 足立くんみたいなになれるわけがないとありますが、「ぼく」

問三——線③「足立くんみたいになれるわけがない」とありますが、「ぼく」

は「足立くんみたい」な人をどのような人だと考えていますか。十五字

以内で答えなさい。

問四 ア イ ウ エ に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中

から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しりごみ イ はなればなれ

ウ うやむや エ しどろもどろ

問五 ④ に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア 悔しき イ 恥はずかしき

ウ もどかしき エ にくらしき

問六——線⑤「ぼくはまたはっとした」とありますが、「ぼく」はどのようなことに気付いたのですか。解答欄に合うように、五十字以内で説明

しなさい。

【五十字以内】というところ。

問七——線⑥「それを見てぼくは目を丸くした」について説明した文として

適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 百人一首大会への優勝に対して、強いこだわりを持つ飯島さんを見

て、とまどった。

イ 百人一首大会の準備を進めるために、しっかり戦略を練っている飯島さんを見て、感心した。

ウ 前にいっしょの班になったときに話した内容を、今も記憶している飯島さんを見て、感動した。

エ 百人一首大会の特訓に対する報酬として自分の好物を差し出すほど、真剣に優勝を目指している飯島さんを見て、驚いた。

問八 ⑦に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 迷わず頼たのみを聞いてあげるんだろうな

イ はつきり自分の言葉で断るんだろうな

ウ 友達を巻きこんで盛り上げるんだろうな

エ 何も言わず寄りそってあげるんだろうな

問九 —線⑧「報酬のアーモンドフィッシュは、特訓の最中に三人で分けあって食べた」の表現効果を説明したものととして適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 飯島さんの好物であったアーモンドフィッシュを二人で分ける描写によって、「ぼく」の劣等感がなくなり三人の絆きずなが深まったことを読者に伝えている。

イ 「ぼく」が飯島さんから報酬としてもらったアーモンドフィッシュを三

人で分け合う描写びやうによって、「ぼく」が飯島さんと足立くと一緒に優勝に向けて意気込んでいる様子を印象づけている。

ウ 本来は「ぼく」のものであったアーモンドフィッシュを三人で分け合う描写によって、足立くんが特訓に参加することを「ぼく」がよく思っていないことを暗示している。

エ 「ぼく」と飯島さんの好物であるアーモンドフィッシュを三人で分ける描写によって、転校する飯島さんへのはなむけとして三人だけの思い出づくりをしていることを示している。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

風車と風車守がつくった国

「はじめに」に書いたように、気温が上がると空気中の水蒸気の量が増え、雲がでやすくなるのでたくさん雨が短時間で降りやすくなります。地球温暖化でその傾向が強くなっています。日本では、豪雨災害から身を守るために「早めの避難」が呼びかけられています。X、逃げたくても逃げられない人もいます。二〇二〇年七月の熊本県の球磨川水害では、浸水しやすい一階建て住宅に住む高齢の方や障害をもった方が避難をすることができずに被害にあいました。

この問題を解決するためにはどうしたらよいでしょうか。

二〇一九年、ぼくはオランダに行きました。

オランダには「世界は神さまがつくったけれど、オランダは〇〇がつくった」という言葉があります。さて、「〇〇」とは何でしょうか。

オランダの正式名称は、「低い土地」を意味する「ネーデルランド」です。

日本のもっとも高い場所は、富士山頂上の三七七六メートル、地上でもっとも低い場所は、秋田県八郎潟のマイナス四メートルです。オランダでもっとも高い場所に行ってみました。南部の町、マーストリヒトの郊外にあるフールスという場所で、標高三二・五メートルです。

次にいちばん低い場所に行ってみました。それはニーウェルケルク・アー

ン・デン・エイセルという町の郊外にあり、マイナス六・七四メートルです。オランダの土地は全体的に低く、国土の三分の一がゼロメートルよりも低い位置にあります。

風車守の誇り

「オランダは〇〇がつくった」の話を聞くために、世界遺産に指定されているキンデルダイクに行きました。日本よりも空が広く感じられます。高い建物や山がないからでしょう。地平線が見えます。やわらかな草が風にそよぎ、湿地帯のなかを運河がゆっくり流れます。水面にいくつもの風車が映っています。ゆっくりと羽は回転しますが、水はさぎなみすら立てません。ここで「風車守」のフックさんに会いました。

「わたしたちの先祖は十三世紀頃から浅い海を干しあげ、『ポルダー』と呼ばれる干拓地をつくってきた。だから、オランダはオランダ人が作ったという自負がある」

かつてオランダ人が干拓地をつくるのに活躍したのが、風車です。風車は古くからペルシアで水の汲み上げに使われていました。①十一世紀頃、十字軍によってペルシアからヨーロッパに伝えられ、風の強いオランダで威力を發揮しました。最初は小麦をひいたり、油を絞ったりするのにかわれていましたが、その後干拓につかわれるようになりました。

フックさんが干拓の手順を教えてくださいました。

「浅い海だった場所を陸地にしていったのですか。大変な労力がかかったでしょうね」

「この仕事には、あらゆる干拓地住民の協力が必要だった。貴族も農民も関係ない。オランダはオランダ人がつくったというのは、身分や階級を超えた協力で国土ができたという意味がある」

その後、風のエネルギーを動力に変える風車のメカニズムは、船舶技術に
せんぱく 応用されました。それが、オランダが②海洋王国として発展する 礎 となりました。やがて電動式のポンプが普及すると、風車はしだいに姿を消し、現在は世界遺産のキンデルダイクなどに残っています。

「風車は古い技術だがいまでも現役さ。キンデルダイクにある一九機の風車のうち、一四機は動いている。風車のなかには、わたしのような風車守が住んでいる。風車守が 丹念たんねんに整備しているから、③いざという時には、電動式ポンプの代役が果たせる。停電ていでんになったら電動式ポンプは役に立たないからね」

フックさんは、一七四六年から代々続く風車守の一〇代目です。

「風車守は、昔から公務員なんだ。一定の水準の給料はもらっているけれど、風向きや雨の降り方を感じながら二四時間体制で風車をコントロールする必要があるので、仕事時間を考えると安い。それでも、自然を観察しながらまちを守るこの仕事は、多くの人から尊敬される。息子たちは別の仕事をしているけど孫にはぜひとも風車守になってほしい」

言葉から「仕事への誇り」を感じました。

川のための空間をつくる

オランダの低地では、つねに 高潮たかしおや洪水こうずいに悩まされてきました。西暦九〇〇年から一九〇〇年の間に一二〇回を超える水害の記録が残っています。とくに近年は気候変動によって短時間にたくさん雨が降り、何度も洪水が発生しています。一九九五年の洪水では、二五万人もの人たちが一週間以上、避難生活を余儀なくされました。古くから、オランダでは海の水を堰*1で食い止めたり、川の堤防を高くしたりして 水災害すいさいがいへの対策をとってきましたが、④この方法では、今後ますます大きくなる水災害の危機に対応できないという思いが、人びとに広がってきています。

そんななか二〇〇八年、オランダで全国的に新しいプロジェクトがスタートしました。それは「⑤ルーム・フォー・ザ・リバー」といい、洪水のときに水があふれる場所をあらかじめつくるというものです。水を押しさえ込こむのではなく、水をあふれさせるまちづくりです。

堤防を高くすることに代表されるこれまでの 治水*2は、高い 壁かべで水と人間の世界を分けるものでした。一方の「ルーム・フォー・ザ・リバー」は、遊水地*3をつくったり、川幅かわはばを広げたりと「水のための空間」をつくります。「ルーム・フォー・ザ・リバー」の目的は、治水だけではありません。人が心地よく暮らすための空間をつくるねらいもあります。これまで他の地域の例で見

てきたように、本来水辺は人びとに恵みをもたらすのですから。

Y、オランダ国内を東から西へと流れるワール川の周辺に住む人々は、大規模な土木工事計画を「よりよい暮らしをつくる機会」としてとらえ、熱心に話し合いました。じつは、計画通りに進めば工事によって引越さなくてはならない人も多く、最初は反対の声が多かったのです。そこで人々は時間をかけて、理想的な未来を共有し、何度も話し合いを行ったうえで合意することができました。

フックさんの言葉を思い出しました。

「貴族も農民も関係ない。オランダはオランダ人がつくったというのは、身分や階級を超えた協力で国土ができたという意味がある」

未来を見据えて考え、行動するという姿勢を学びたいと思いました。

(橋本淳司『水辺のワンダー』「世界を旅して未来を考えた」より)

なお、本文には省略等があります。

*1 堰……水を取り入れたり、水の量を調節したりするために、川などの途中に作られた構造物。

*2 治水……洪水などの水害を防いだり、農業用水の便を確保したりするた

めに、河川の改良・保全を行うこと。

*3 遊水地……洪水時に、河川から水を流し入れて一時的にため、流量の調節を行うところ。

問一 X・Yに入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一

つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア または イ たとえば ウ しかし エ すると

問二——線①「十一世紀頃、十字軍によってペルシアからヨーロッパに伝えられ、風の強いオランダで威力を発揮しました」とありますが、この文の主語を、本文中から抜き出しなさい。

問三 の段落の働きの説明として適当なものを、次のア～エの中から

一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本とオランダの最高地点、最低地点を比較し、オランダという地名の由来が適切であることを示している。

イ 日本とオランダの最高地点、最低地点を比較し、日本の治水対策の問題点をあらためて考えさせている。

ウ 日本とオランダの最高地点、最低地点を比較し、各国の問題解決の手順を示す前置きとしている。

エ 日本とオランダの最高地点、最低地点を比較し、オランダの景観の優れた点に論点を移している。

問四 手順の空欄には、次のア～エの各文が入る。適切に並べかえて、

それぞれ記号で答えなさい。

ア これで干拓地ができる。

イ 干拓地に、陸のほうから雨水が流れてきたり、地下水が上がってきたりしたら、堤防の外の水路に排水するんだ。

ウ 次に海水を風車でかき出す。

エ まず、海の浅いところに堤防を設けて海水をせき止める。

問五 — 線②「海洋王国として発展する礎」とありますが、それは何ですか。三十五字程度で答えなさい。

問六 — 線③「いざという時」とはどのような時ですか。十五字程度で答えなさい。

問七 — 線④「この方法」とはどのような方法ですか。解答欄に合うように、七字で抜き出しなさい。

【七字】方法。

問八 — 線⑤「ルーム・フォー・ザ・リバー」について、純子さんは次のようにまとめました。[1] [3]に入る言葉を、本文中の言葉を使って、二十字程度でそれぞれ答えなさい。

新しいプロジェクト「ルーム・フォー・ザ・リバー」

1. プロジェクトを始めるきっかけとなった人びとの思い

☞ 今までの水災害対策では、

[1]

2. プロジェクトの内容

☞

[2]

3. プロジェクトの目的

・ 一つ目……治水

・ 二つ目…… [3]

問九 ― 線「オランダは〇〇がつくった」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「〇〇」に入る言葉を五字程度で探し、解答欄に合うように答えなさい。
オランダは【五字程度】がつくった

(2) (1)のように言えるのはなぜか。本文中の言葉を使って、六十字以内で答えなさい。